

中級日本語コースにおけるディベート授業の実践報告

— 学習者モチベーションの維持と向上を目指して —

A Practical Report on Classroom Debates in an Intermediate Japanese Language Course

— Maintaining and Improving Second Language Learner Motivation —

長谷川 孝子
HASEGAWA Takako

〔要旨〕

本稿は立教大学日本語教育センター「2019年度春学期聴解会話（中級後半）」コースで行ったディベートの実践報告である。学習者の授業への期待と授業目標を一致させたディベート授業の計画と実践を行い、学習者が授業内で記入したふり返りシートから学習者のディベート授業への意識について考察した。ふり返りシートの分析からは、調査協力者全員がディベート授業に対して肯定的な意識を持ったことが確認された。しかし、詳細を見ていくと、「難しさ」や「不安」など否定的な意識を持つ学習者も確認された。2名の学習者の意識の変化を見ると、学習者モチベーションの維持や向上のためには、①「苦手部分を補う段階的な練習」、②「チームメンバーとの協力」が重要な鍵となることが推定された。これらの結果から、学習者がチームメンバーと協力しながら、反論練習を段階的にを行い、実践を繰り返す授業を提案する。

Key word: ディベート、授業目標、期待、満足度、不安



1. はじめに

大学や日常生活で必要な相手との交渉力を育てるために、ディベートを授業で実施することは有効であると思われる。しかし、日常の会話が自由にできない学習者の場合、知識や何かについて交渉した経験などの総合力が問われるディベートは負担が大きく、途中で挫折してしまう可能性が大きい。学習者モチベーション維持や向上のためには、具体的で達成可能な目標を設定し、授業を進めることが効果的であると思われる。長谷川（2019）は教育機関と学習者、それぞれのニーズと状況を分析し、目標を定め、ディベートを行った。そして、学習者が目標を達成した様子を報告している。しかし、学習者のディベートに対する意識は否定的なものが多かったという結果も見られ、それは学習者の期待と授業目標が合致していなかったのが原因ではないかと考えられた。そのため、学習者の授業への期待と授業目標を一致させたうえで、さらに学習者や教育機関のニーズや状況を考慮した授業と学習者意識の関係にまで考察を進める必要がある。本稿では、まず、学習者の授業への期待と授業目標を一致させたディベート授業の計画と実践の報告をし、次に、学習者のディベート授業への意識について考察を行う。最後に、考察の結果を踏まえ、今後の授業への提案を行う。

2. 調査の概要

2.1. 調査対象のディベート授業

2.1.1. ディベート授業の概要

対象となるディベートの授業は、筆者が担当した立教大学日本語教育センター「2019年度春学期聴解会話」コースの一環として行われた授業で、日本語中級後半のコースである。週1回100分で、1学期14回行われるコースであった。そして、14回の授業の10日目～13日目の4日間でディベートに当てられた。学習者は学部生5名と大学院生6名の計11名で、全員が必修の授業であった。国籍は、韓国1名、シンガポール1名、中国9名であった。

ディベートのチーム分けと対決するチームは、学生の個性や能力を考慮しながら筆者である教師が決定した。チームは2人チームが1つ、3人チームが3つで合計4チームとなった。ディベートでは肯定側と否定側のチームで1つのグループのため、2グループがディベートを行うこととなった。ディベートの本番は口頭表現の期末試験となっていた。主な教材は『知のナビゲーター』（中澤・森・本村編 2007）から抜粋したものである。

2.1.2. ディベートの目標設定までの手順

限られた時間の中で効果的なディベート授業を行うために、学習者や教育機関のニーズや状況に合った具体的な目標設定が必要である。目標設定の手順はRichards（2017）の既存研究を基にしたものである。具体的には、まず、①「ニーズ分析（学習者視点）」、②「ニーズ分析（教育

機関視点)」、③「学習者の状況分析」、④「教育機関の状況分析」を行った。その後、①～④に合う「具体的な達成目標」を決定した。ニーズ分析とは、学習者が言語を使う目的や必要な能力などの学習内容決定のための分析、状況分析とは授業に影響を与える可能性のある要素の分析である。分析の参考としたものは、2種類ある。学習者の分析に関しては、聴解会話コース開始時に授業の一環で行った「学習者アンケート」を参考にした。この「学習者アンケート」は、学習者の日本語学習へのニーズと、これまでの日本語学習経験など学習状況を確認したものである。教育機関の分析に関しては、立教大学日本語教育センターが定めたカリキュラム内容を参考にした。このほか、学習者のそれまでの学習成果、学習者へのヒアリング、授業の中での観察からも分析を行った。具体的な分析結果を以下に示す。

① ニーズ（学習者視点）：

1. 会話能力、コミュニケーション能力
2. 相手の意見を理解し、自分の考えを即座に表現する運用力

② ニーズ（教育機関視点）：下記 1、2 を要件として満たすことを想定

1. ディベート形式の理解と経験
2. チームで協力しながらのディベートの経験

③ 学習者の状況：

1. 11名中、ディベート経験者2名
2. 自分の意見を準備する時間があった上で、それを話せるというレベル
3. 授業外での準備時間は十分でない可能性がある
4. ディベートのチームは必ずしも面識ある者同士ではない

④ 教育機関の状況：

1. ディベートの導入、準備、練習、実施を4日間で行う
2. ディベート本番を期末試験とする

2.1.3. ディベートの目標

2.1.2. で述べたニーズと状況分析を行った後、それらの結果を基にディベート授業の具体的な目標設定を行った。ここで注意したことは、学習者が日本語学習に何を求めているかという期待である。2019年度に行われたディベートでは、学習者の授業への期待と授業の目標が合致していなかったため、学習者のディベート授業の満足度が低かったことが推測された（長谷川2019）。その際、学習者がディベートに期待するものは「相手の意見を理解し、自分の考えを即座に表現する運用力」だと考えられた（長谷川2019、111）。今回の報告でも、コース開始時に行った学習者状況のアンケートから、学習者は「日本語運用力」を重視していることが窺えた。アンケートの中の「目標」「できるようになりたいこと」では、初日欠席者1名を除いた出席者全員が「会話」「自然に話すこと」など「日本語運用力」に関する内容を書いていたのである。

そのため、授業の目標 (goal / aim) で「自分の考えを即座に表現する運用力」をつけることを重視した。Richards (2017) では、授業の一般目標を「goal/aim」、さらに細分化した目標を「objectives」としているが、本稿では一般目標を「ディベート授業の目標 (goal/aim)」、細分化した目標を「行動目標 (objectives)」とする。以下にディベート授業の具体的な目標を示す。

ディベート授業の目標 (goal / aim) :

1. 中級レベルの日本語学習者に向けたディベート授業を行う
2. ディベート形式を経験しながら、意見交換できる日本語運用力の習得を目標とする

行動目標 (objectives) : 以下の習得を目標とする

1. DVD 視聴とハンドアウトでディベート形式を理解する
2. 根拠を示しながら主張を考えられる
3. 相手側の主張を聞き、メモをとりながら理解できる
4. 相手側への反論内容を見つけ、根拠を示しながら反論を考えられる
5. 主張と反論で使用する日本語表現を理解し、使用することができる
6. ディベートの構成に沿って、主張と反論ができる
7. チームで協力して主張と反論ができる

2.1.4. ディベート授業の流れ

「ディベート授業の目標 (goal/aim)」と詳細な目標である「行動目標 (objectives)」を決定後、それらが達成できるように、ディベート授業の流れの詳細を決定した。以下に4日間で行われるディベート授業の具体的な流れを挙げる。

ディベート授業4日間の具体的な流れ

1日目 ディベート導入

- ・ディベート概要、ディベートの進め方の理解
- ・主張の考え方の紹介、主張を考える (ペア作業)

2日目 ディベート準備

- ・ディベートの流れの具体例を確認
- ・主張と反論の例、日本語表現の理解、練習 (ペア練習)
- ・次週のディベートの準備 (チーム作業)

3日目 ディベート練習

- ・ディベート最終打ち合わせ（チーム作業）
- ・2 グループのディベート
 - 1 『お店に行って買物するより、インターネットショッピングのほうがいい』
 - 2 『宿題はあるよりないほうがいい』
- ・次週のディベートの準備（チーム作業）

4 日目 ディベート本番（期末試験）

- ・ディベート最終打ち合わせ（チーム作業）
- ・2 グループのディベート
 - 1 『住むには田舎より都会の方がいい』
 - 2 『映画を見るより、本を読むほうが楽しい』

論題は『英語ディベート練習ハンドブック [即興型]』（小林 2018）、『知のナビゲーター』（中澤他編 2007）、『日本語ディベートの技法』（松本 2001）の中で提示されている中から、学習者にとって興味がありそうな論題をいくつか提示した。学習者のディベート経験や日本語レベルを考慮し、初級の問題を多く選んだ。そして、提示した論題の中から、学習者が自分たちのディベートで行いたい論題を選択した。

2.1.5. 授業のふり返し

2.1.4. で述べた毎回の授業の終わりには「授業のふり返し」の時間を入れた。以下は「授業のふり返し」の概要である。

- 1 回目授業（ディベート導入） ⇒ 「授業のふり返し」①
- 2 回目授業（ディベート準備） ⇒ 「授業のふり返し」②
- 3 回目授業（ディベート練習） ⇒ 「授業のふり返し」③
- 4 回目授業（ディベート本番） ⇒ 「ディベート本番後のふり返し」
「ディベート授業全体のふり返し」

1～3 回目の授業では当日の「授業のふり返し」、4 回目のディベート本番後に「ディベート本番後のふり返し」と「ディベート授業全体のふり返し」を行った。学習者がふり返しシートにコメントを記入し、教師が回収するという方法で行った。学習者は「授業のふり返し」で、授業内容の達成度、難易度、理解度、次の目標、授業後の感想などを簡単に書いた。最終日に行ったディベート本番後、「ディベート本番後のふり返し」と「ディベート授業全体のふり返し」を行った。「ディベート本番後のふり返し」では、学習者がディベート本番直後に達成度、反省や感想を書いた。続いて、「ディベート授業全体のふり返し」では、ディベートをしてよかったか、やりたくないと思うかなど、ディベート授業全体に対してふり返しを行った。

これらふり返しを授業に組み込んだ理由は 2 点ある。学習者が自己をふり返るためと、教師が

学習者の状況を確認するためである。まず、学習者が自己をふり返ることは、学習者モチベーションの維持や向上に繋がると考えられる。学習者にはふり返りをする意味を伝え、本当の気持ちを記入してほしいことを伝えている。また、これらのふり返りの結果は教師が学習者の理解度や不安などの状況を把握するためにも使用した。Richards (2017) は『Curriculum Development in Language Teaching』の中で、語学カリキュラムの効果的な展開方法を紹介している。重要な考え方の1つとして、カリキュラムを常に変化するものとして捉えるアプローチを紹介している。授業は教師が教えた内容、学習者の成果など、様々な要素が相互作用して変化し続けていくという考え方である。この考えに基づき、学習者の期待に沿った目標を達成するために、教師は学習者状況を常に観察し、必要な場合は教材や授業の進め方などに修整を加えながら授業を進めていった。以上、2.1. では授業実践について述べた。続いて、授業を受講した学習者のディベート授業への意識を分析していく。

2.2. 調査協力者

調査対象者は2019年度春学期聴解会話コースでディベート授業に参加した学習者である。4日間のディベート授業終了後、文書と口頭で調査内容の説明を行い、調査への協力を募った。授業での提出物や活動記録を研究に使用することに同意してもらえる場合に、同意書に署名してもらった。今後の授業改善のために調査が必要なこと、個人が特定されないようにすること、また、協力は任意であり成績には影響しないことを強調した。協力が難しい場合は同意書に署名をせずに提出しても問題ないことを伝えた。調査協力者は、ディベートに参加した11名のうち同意書に署名があった10名である。

2.3. データと分析方法

学習者意識を分析するための主なデータは以下の3種類である。

- (1) 「授業のふり返り」3回分
- (2) 「ディベート本番後のふり返り」の中の「反省と感想」
- (3) 「ディベート授業全体のふり返り」の中の以下4つの質問
 - ① 「ディベートをしてよかったですか」
 - ② 「どんなことがよかったですか」
 - ③ 「ディベートをやりたくないですか」
 - ④ 「どんなことがやりたくないですか」

これら3種類のデータを使用し、学習者意識について現場教師の視点も入れて考察する。分析は前述の結果から2つの観点で行い、それらの分析の概要と使用したデータの詳細は以下の通りである。

1. 満足度 【分析の概要】 回答者全員の回答結果を満足度の観点からまとめる
【使用データ】 回答者全員の上記(2)(3)のコメント
2. 意識の変化 【分析の概要】 回答者2名の回答結果を意識の変化の観点からまとめる
【使用データ】 回答者2名の上記(1)~(3)のコメント

3. 結果と考察

3.1. 学習者全体の満足度

3.1.1. ディベート本番後のふり返りの結果

学習者10名のディベート授業に対しての「満足度」をディベート本番後のふり返しから考察する。まず、ディベート本番後のふり返りのコメントであるセルフチェックシートの中の「反省と感想」に絞って分析する。「反省と感想」は自由にコメントを書くようになっており、学習者の満足度が表れやすいと考えられるためである。学習者が書いたコメントを見ると、全員、肯定的なコメントを書いていることが分かる。これら肯定的なコメントを2種類の評価に分類した。1つ目は感情面の評価、2つ目は意識面の評価である。コメントに快／不快のみ表れているものを感情面の評価とし、学習内容に対して具体的な気づきを書いているものを意識面の評価とした。初めに、感情面の評価の結果を述べる。表1は感情面における評価コメントの分類と各分類に当てはまる内容を書いた学習者を記したものである。感情面のコメントは7種類に分類し、学習者をA～Jのアルファベットで表した。

表1. 《2.3.-1. 満足度》 学習者の感情面における評価

コメントの分類	学習者
1. 楽しい	C G
2. 面白い	H J
3. 好き	B
4. うまくいった	A
5. 無事終わってよかった	I
6. やればできる、自信を持った	D H
7. 感情面のコメントなし	E F

次に、意識面の評価の結果である。表2は学習者の意識面の評価のコメントである。3名が達成内容を書いている。下記の表の【 】内はコメント内容を考慮してラベリングしたものであり、コメント自体は、学習者の言葉をそのまま抜粋したものである。()内はコメントの意味が不明確な場合、筆者が推測して言い換えた内容である。A～Jは学習者を表している。

表2. 《2.3.-1. 満足度》 学習者の意識面における評価

達成度についてのコメント
【チームワーク】【コミュニケーション能力】 C チームワークを高めし（高め）、自分の説明することは練習して、自分のコミュニケーション能力を高めました。
【時間配分】【論題内容の理解】 H できた：時間配分、論題によく理解した。
【会話力】 J チームでクラスメートとコミュニケーションする時、自分の日本語会話力は高くなりました。

表1の学習者の感情面のコメントを見ると、10名中8名が肯定的な感情を書いていることが明らかである。「好きではない」「やりたくない」などの否定的なコメントは見られなかった。表2を見ると、3名が達成できた具体的な内容について述べているのが分かる。つまり、10名中8名の学生がディベート授業に対して肯定的な意識を持ち、さらに3名の学生が達成感を感じていたことが明らかとなった。これらの結果から、学習者のニーズと状況を十分に考慮した目標設定が学習者の満足度に繋がったと考えられる。具体的で達成可能な目標であることから、「むずかしい」「できない」という感情を抱く学習者が少なかったのではないだろうか。また、【コミュニケーション能力】と【会話力】の達成についてのコメントから、学習者が期待する「意見交換できる日本語運用力」を目標としたことが肯定的な感情に繋がったと考えられる。

3.1.2. ディベート授業全体のふり返りの結果

続いて、ディベート授業全体のふり返りのコメントからも、学習者10名の満足度を考察する。満足度が表れやすい4つの質問①「ディベートをしてよかったですか」、②「どんなことがよかったですか」、③「ディベートをやりたくないと思いますか」、④「どんなことがやりたくないと思いますか」に絞って学習者の満足度を考察する。なお、特に意見がなければ回答を書かなくてもいいと学習者へ伝えていた。下記の【 】内はコメント内容を考慮してラベリングしたものであり、コメント自体は、学習者のコメントから要点を抜粋したものである。コメントの意味が不明確な場合、筆者が推測して言い換えている。A～Jは学習者を表している。

① 「ディベートをしてよかったですか」

- ・学習者10名中9名「はい」、「よかったです」、「いいと思います」などと回答
- ・1名（J）空欄（②でよかったことを回答している）

② 「どんなところがよかったですか」

【日本語力】

- A 日本語力を高めることができる。
- F 日本語の能力向上ができた。
- E 日本語で発表してよかった。

【コミュニケーション能力、日本語以外の能力】

- C コミュニケーション能力が上がった。
- E 論理的な能力と臨機応変に対応する能力。
- I 説得力や表現力が成長した。

【グループでの協力】

- B グループで協力することの大切さが分かった。
- C みなと協力して、チームワークができた。
- G 他の人と協力して努力することがいい。
- J クラスメイトと協力してとても良い内容になった。

【その他】

- B ディベートの流れややり方が分かってきた。
- G ディベートの流れが分かるようになった。
- D 反論、面白かった。
- H 初めてしたから、おもしろい。
- J ディベートの形式はおもしろい。

③ 「ディベートをやりたくないと思いますか」

- B 自分のロジック能力が少し弱いので少し苦手である。
 - ・4名「いいえ」、「やりたくないと思いません」、または「なし」と回答
 - ・5名空欄

④ 「どんなことがやりたくないと思いますか」

- B 反論の部分、相手の話をよく理解していないことで、反論できない。
 - ・4名「特にない」、「なし」、「×」、または「宿題」と回答
 - ・5名空欄

3.1.2.の結果をまとめると、調査協力者である学習者10名全員に授業に対して肯定的で積極的なコメントが見られ、満足度は高かったと言える。コメントの詳細を見ると、「よかったこと」として、【日本語力】【コミュニケーション能力、日本語以外の能力】を挙げている学習者が多い。これらは、2.1.3.で述べたディベート授業の目標「意見交換できる日本語運用力」と一致する。3.1.1.の結果と同様、学習者の期待と合致した目標設定が学習者の満足度に繋がったと考えられる。しかしながら、学習者Bだけ、ディベートを行うことが「Bちょっと苦手」とコメントをしていて、否定的な感情も同時に持っていたことが明らかとなった。続く3.2.と3.3.では、学習者2名の意識の変化から、学習者意識について詳しく考察する。

3.2. 学習者2名の意識の変化

学習者10名のディベート授業に対する最終的な満足度が高かったと考えられる一方、毎回の

授業後に行ったふり返りを詳細に見ていくと、ディベートに対して「難しさ」や「不安」など消極的な意識を確認することができる。続いて、学習者2名の回答結果を意識の変化の観点から分析する。毎回の授業後に行った(1)「授業のふり返し」3回分、(2)「ディベート本番後のふり返し」、(3)「ディベート授業全体のふり返し」のコメントから考察を行う。これらのコメントを見てみると、学習者意識の変化の様子が大きく以下の3種類に分けられることが分かる。

学習者意識の変化の例

1. 学習者が最後まで特に難しさや不安を感じることなく授業を終えた
2. 途中なんらかの難しさや不安を感じたが、乗り越えてディベートを楽しんだ
3. ディベートに対して肯定的な意識を持ったが、難しさや不安を最後まで強く感じた

本節では、難しさや不安な気持ちを多く書いていた学習者HとBに絞り、意識の変化について見ていくこととする。HとBの両例とも、【 】内はコメント内容を考慮してラベリングしたものであり、コメント自体は、学習者の言葉をそのまま抜粋したものである。()内はコメントの意味が不明確な場合、筆者が推測して言い換えた内容である。

学習者Hの例

Hの例は上記「2. 途中なんらかの難しさや不安を感じたが、乗り越えてディベートを楽しんだ」例の一つと言えるであろう。Hの否定的なコメントと肯定的なコメントの概要を以下に示す。

Hのふり返りの否定的なコメント

(1) 授業のふり返し①～③ 〔難しかったこと、分からなかったこと、感想に対する回答〕

- ① 【難しい】 上手く述べること。
- ② 【難しい】 話すこと。【不安】 主張が上手く話せるか不安。
- ③ 【難しい】 反論の考え、反論が難しい。

(2) ディベート本番後のふり返し 〔感想〕

【できなかった】 反論や質疑の準備があまり足りない。

(3) ディベート授業全体のふり返し

否定的なコメントなし

Hのふり返りの肯定的なコメント

(1) 授業のふり返し①～③ 〔できたこと〕

- ①～③ 役割が分かった。

授業のふり返し①～③ 〔感想〕

- ① 【面白い】 面白い。

- ② 肯定的なコメントなし
- ③ 【面白い】面白い授業だ。

(2) ディベート本番後のふり返し〔感想〕

【面白い】面白い経歴（経験）だ。（ディベートが）楽しみだ。

【できた】時間配分、論題によく理解した。自信を持った。

【頑張る】（できなかったことに対して）これから頑張る。

(3) ディベート授業全体のふり返し〔よかったこと〕

【面白い】初めてしたから、おもしろいと思う。

上記の結果を見ると、Hは【難しい】という否定的な意識を持つてはいるが、同時に【面白い】という肯定的な意識を強く持っていたことが分かる。授業2回目のふり返しでは1度【不安】と感じ、肯定的なコメントをしていないものの、ディベート練習後に当たる授業3回目のふり返し以降、再び【面白い】という肯定的な意識を持ち、モチベーションが向上したことが分かった。そして、最終日のディベート本番後のふり返しでは、【できなかった】ことを述べてはいるが、そのことに対して【頑張る】という意欲を見せ、【できた】【面白い】という内容も同時に述べている。ここから、Hのディベートに対する肯定的で積極的な意識が確認できる。

学習者Bの例

Bの例は「3. ディベートに対して肯定的な意識を持ったがものの、難しさや不安を最後まで強く感じた」例の1つである。(3)「ディベート授業全体のふり返し」で「ディベートをやりたくないと思いますか」「どんなことがやりたくないと思いますか」という欄に、唯一意見を書いていた学習者である。Bの否定的なコメントと肯定的なコメントを以下に示す。

Bのふり返りの否定的なコメント

(1) 授業のふり返し①～③〔難しかったこと、分からなかったこと、感想に対する回答〕

① 【難しい】【不安】

ディベートの論点が探しにくいから、事前に準備しないと話せない。

② 【難しい】ロジック能力がないから。

③ 【難しい】ロジックの面でなかなかできない。

(2) ディベート本番後のふり返し〔感想〕

【嫌】最初は嫌で、やりづらい。

（「しかし、本場（本番）でやると、やればやるほど好きになってしまう。」と続く）

(3) ディベート授業全体のふり返し〔「やりたくないと思うか」という質問の回答〕

【ロジックが苦手】自分のロジック能力がちょっと弱いのでやるのがちょっと苦手

ディベート授業全体のふり返し〔「どんなことがやりたくないか」という質問の回答〕

【反論】反論の部分、相手の話をよく理解していないことで、反論できない。

Bのふり返りの肯定的なコメント

(1) 授業のふり返り①～③〔できたこと〕

- ① コメントなし
- ② 【できた】自分側（の主張ができた）
- ③ 【できた】3人協力ができた

授業のふり返り①～③〔感想〕

- ①～③ 肯定的なコメントなし

(2) ディベート本番後のふり返り〔感想〕

【好きになった】最初は嫌で、やりづらい。

しかし、本場（本番）でやると、やればやるほど好きになってしまう。

(3) ディベート授業全体のふり返り〔よかったこと〕

【理解できた】少なくともディベートの流れややり方が分かってきた。

【協力】グループと協力することの大切さを分かった。

上記の結果を見ると、Bはディベートのロジックや論点に【難しい】【不安】と感じていたことが分かる。そして、Hと違って、否定的な意識を打ち消すほどの肯定的な意識を持っていない。授業で【できた】こととして、自分側の主張、3人協力できた、と短くコメントしているが、他の肯定的な意識は見られない。授業の中でも、「普通の会話がしたい」「できない」と不安そうな表情を見せていた。最終日の(2)ディベート本番後のふり返りで、やっと、ディベートを【好きになった】という感情を述べ、肯定的な意識が強くなったことが分かる。(3)ディベート授業全体のふり返りでも、ディベートを「やってよかった」と回答していた。ディベート本番の様子を見ても、グループで協力し、達成感を得られた様子を見ることができた。しかしながら、【ロジックが苦手】ともコメントし、【反論】がやりたくないという回答している。このように、Bはディベートに肯定的な意識を持ったものの、最後までディベートに対してやりたくないという否定的で消極的な意識が残ってしまったことが分かった。

以上が学習者2名の意識の変化である。「難しさ」「不安」を乗り越え前向きな意識、肯定的な意識へ変わる学習者Hと、最後まで否定的な意識が残った学習者Bの違いが見られた。

3.3. 学習者意識の変化の考察とディベート授業の問題点に対する結論

授業の中で「難しさ」や「不安」がモチベーション低下でなくモチベーション向上に繋がる鍵は何であろうか。調査結果から、①「苦手部分を補う段階的な練習」（2019年のディベートよりもさらに段階を細分化したものとして本稿にて新たに定義）、②「チームメンバーとの協力」の2点が考えられる。

1つ目の「苦手部分を補う段階的な練習」のために、教師は学習者の苦手な箇所をいち早く見極めて段階を追った練習を取り入れる必要がある。今回の授業では、2019年のディベートで提案されている「段階を追った練習」（長谷川 2019、111）を授業に取り入れていた。話すことが【難しい】と感じる学習者が多かったため、チーム内で十分な打ち合わせの時間を取り、主張部分の練習時間を取るようにした。相手の主張のメモをとり、そのメモを確認しながら自分たちの主張と反論を考える段階を追った練習を行った。このような練習をした後のHのふり返しコメントを見ると、ディベートに対して否定的な意識が肯定的な意識へ変化した様子が分かる。

しかし、今回の調査結果から、特に反論部分に関してはさらなる練習が求められていることが分かった。以下はふり返りのコメントから学習者2名が感じた「難しかったこと」「不安なこと」「やりたくないこと」に当てはまるコメントをまとめたものである。

難しかったこと : H 上手く述べること、反論の考え、反論

B ディベートの論点、ロジック

不安なこと : H 主張が上手く話せるか不安

B ディベートの論点が探しにくいから、事前に準備しないと話せない。

やりたくないこと : B 反論の部分。相手の話をよく理解していないことで、反論できない。

HとBの回答から、2人とも反論部分に難しさを感じていることが明らかである。さらに、他の学習者のふり返りの結果を見ると、反論に「難しさ」「不安」を感じていた学習者が4名いることが分かる。論理的に話すことが苦手な学習者にとっては、反論部分の考えを整理し伝える練習が十分でなかったと考えられる。

また、ディベート実践の際、欠かせないのは2つ目の②「チームメンバーとの協力」である。初めのうちは、前向きなコメントを書いていた学習者Bはディベート練習後、「3人協力できた」とコメントしている。学習者Hはチームの協力についてはコメントを残していないが、授業の様子から、チームメンバーがHの苦手な反論部分をうまく補っていたことが観察されていた。「主張がうまく話せるか不安だ」とコメントしていたHのコメントはディベート練習後に「面白い授業だ」と前向きなコメントに変化している。授業では、話す力のある学習者がほかのメンバーのフォローができるように、教師がチームメンバーの組み合わせを考えた。チームの協力が不十分な場合、話す力のある学習者がリーダーシップを発揮できるように、教師がアドバイスをした。さらに、授業時間内でチームでの準備時間を十分にとるようにした。これら授業内での工夫も、チームワークを高めることに繋がったと思われる。不安だと思っていた学習者も、チームメンバーが足りない力を補ってくれたおかげで、達成感を味わうことができた様子であった。さらに、チームメンバーとの協力によって、自分に必要な力をイメージすることができ、次の目標を見つけるという前向きな意識へと繋がる可能性が大きいのではないかと考えられる。

以上のことから、学習者の「難しさ」や「不安」が負の方向へ進まないためには、①「苦手部

分を補う段階的な練習」、②「チームメンバーとの協力」が重要な鍵となると言える。

4. 次回のディベート授業の主な修整点

今回のディベート授業は、最終的には学習者全体の満足度が高かったと考えられる。しかし、何人かの学習者が「難しさ」や「不安」を持っていることが確認された。このような学習者の満足度を上げるために、3.3. で述べた①「苦手部分を補う段階的な練習」、②「チームメンバーとの協力」を取り入れた授業の進め方についても考えたい。

日本語が中級レベルでディベート経験がない学習者の場合、運用力をつけるためには「段階的な練習」をすることが有効であると考えられる。今回のディベートでも、「①意見を聞く、②理解をする、③反論をする（長谷川 2019、111）」という段階的な練習を取り入れた。しかし、「反論が難しい」「ロジックができない」という学習者の声があるように、反論が即座に思いつかないという学習者が確認された。そこで、この中の「③反論をする」部分について、反論の手がかりを示し、さらに段階を追って練習することを提案したい。具体的には、反論部分の練習を3段階に分けて進める。まず、発想例と日本語表現を理解する段階である。以下は、小林（2018、23）が『英語ディベート練習ハンドブック [即興型]』の中で提示している反論の手がかりを基に、今回の学習者に合わせて一部変更を加えたものである。

ディベートの反論

先ほど、_____とおっしゃいましたが、

1. 正しくありません。
2. いつも正しいとは限りません。
3. 重要ではありません。
4. 論題と関係ありません。
5. 結果は逆です。

なぜなら、_____からです。

次に、相手側主張を想定し、上記1～5を手がかりに反論内容を考える。最後に、何度か実践練習を重ね即座に反論できるような力に繋げる。練習の仕方については、3.3. で提案しているように、「チームメンバーとの協力」が効果的なことを考えると、この一連の練習もチームで行うことが望ましいだろう。このように、学習者に足りない力を補うための教材、足りない力をチームで補いながら目標を達成することなどが、学習者モチベーションの向上に繋がると考えられるのである。

5. おわりに

本稿では、学習者の授業への期待と授業目標を一致させたディベート授業の計画と実践を行い、その後、学習者のディベート授業への意識について考察した。調査協力者全員がディベート授業に対して肯定的な意識を持ったことが明らかになったのだが、「難しさ」や「不安」など否定的な意識を持つ学習者も確認された。学習者モチベーションの維持や向上のためには、①「苦手部分を補う段階的な練習」、②「チームメンバーとの協力」を取り入れた授業が望ましいと考えられた。

今回の結果から、教師が学習者と教育機関のニーズと状況を分析したうえで、具体的で達成可能な授業の目標を定めること、学習者状況を観察しながら授業を進めることは学習者が「よかった」と思う授業への第一歩だと考えられる。その際、日本語習得のための効果的な練習を考えることも重要である。今後は、ディベートだけではなく他の授業においても、授業実践と学習者意識の関係を見ていきたい。そして、質問の設計をさらに工夫した質問用紙とともに、フォローアップインタビューを併用し、学習者意識を明確に探ることを今後の課題としたい。

参考文献

- 小林良裕（2018）『英語ディベート練習ハンドブック [即興型] An Introduction to Debating in English [book4] Practicing Parliamentary Debate』第2版、S.A.D.Works（電子版）。
- 中澤務・森貴史・本村康哲（編）（2007）『知のナビゲーター：情報と知識の海-現代を航海するための』くろしお出版。
- 長谷川孝子（2019）「ディベート授業で学習者は何を求めているのか——学習者の振り返りから見た今後の修整点の発見——」『日本語・日本語教育』第2号、99-114。
- 松本茂（2001）『日本語ディベートの技法』七寶出版。
- Richards, J.C. (2017). *Curriculum Development in Language Teaching* (2nd ed.). Cambridge, New York: Cambridge University Press.

最後に、授業のご相談をさせていただいたコーディネーターの嶋原耕一先生にお礼申し上げます。

資料1.

《2.1.5. 授業のふり返し / 2.3. データと分析方法》「授業のふり返し」

今日の授業のふり返し

名前 _____

次の授業の参考にします。

何もなければ書かなくても大丈夫です。

1. 「できたこと」、「できるようになったこと」
2. 「難しかったこと」、「分からなかったこと」
3. 「次にできるようにになりたいこと」
4. 感想（「よかったこと」「不安なこと」なんでも）

資料2.

《2.1.5. 授業のふり返し / 2.3. データと分析方法》「ディベート授業全体のふり返し」

ディベートの授業のふり返し

名前 _____

何もなければ書かなくても大丈夫です。

1. ディベートをしてよかったと思いますか。
2. どんなことがよかったと思いますか。
3. ディベートをやりたくないと思いますか。
4. どんなことがやりたくないと思いますか。
5. ディベートを終えて、次にできるようにになりたいことはありますか。
6. その他、不安だったことや感想があれば何でも書いてください。